罪は裏切り

島根県島根大学教育学部附属義務教育学校　８年　松林　瑠那

犯罪は自分たちが思っているよりも身近なところにあるものだと思う。感じにくいものではあるが、大きいものから小さいものまで犯罪の種類は数えきれないほどある。私の身近な所でも数年前、自分が思ってもみなかった人の予想外の犯罪が起こったことがあった。

私がまだ小学生だった時、私の本当に身近な人が盗撮で逮捕されるということがあった。その人はとても優しくて、明るくて、私自身もその人を何も疑わずいい人だと思っていた。なので、その話を聞いた時は、単純に驚いた。

この出来事があった後、少ししてから、カウンセラーの方に自分が思っていることを話す機会があった。何回か質問をされた後、最後の質問として、「最初からその人がやったと思っていたか」という質問をされた。その質問をされた時、私は自分が最初のころは犯人は別の人で、その人がやっているはずがないと信じて疑っていなかったことを思い出した。容疑者として名前が挙がっていた時、他の人が「あいつがやったんじゃないの」とその人を疑っていても、適当に相づちを打ちながら、心の中では「そんなわけないじゃん」と気持ちが揺らぐことはなかった自分。根拠もないのに、またその人と過ごす当たり前の日常が戻ってくることを信じていた自分。事実を知るまではその人を疑ったことなんて、ただの一度もなかった。だからこそ、犯人はその人だということを聞いた時、心から驚いたんだと気づいた。その人が優しいことも、明るいことも、存在していることも何もかもが私の日常であり、当然のことだと思っていたから。

私は、カウンセラーさんからの最後の質問に自分がどう答えたかを今でも鮮明に覚えている。

「私はその人が犯罪を犯したとは思ってもみなかった。その人のことが人として好きだったし、とても信頼していたので事実を聞かされた時も、一瞬、「嘘なんじゃないか」と心の中で思っていた。」

これは私の本音だった。思ってもみなかった人の急な事件、急変したその人への周りの態度に流されそうになっていた自分の本当の思いはこれだった。もっと言えば「なんでそんなことしたんだろう」や、「どういう気持ちだったんだろう」という疑問だって、私の心には無数にあったと思う。けれど、自分の気持ちに素直になったら、たった一つ「裏切られた」ということへの驚きしか残っていなかった。

この出来事は自分史上一番のショックや驚き、悲しみを味わった出来事だっ

たと今でも思う。だからこそ、こうして月日がたった今でも、ふと思い出して胸が張り裂けそうな気持ちにも実際になっている。その人の優しさを思い出すたびに、楽しかったあの頃がよみがえり、胸の苦しみはさらに強くなっていく。

私はこの出来事で「裏切られた悔しさ」を強く心に抱いた。実際、その人を信頼していた人ほど、裏切られたという思いは強いんじゃないかと思う。犯罪を犯せば、自分はもちろん、その周りの人達も心にできた傷を治し、次の新たなステップへと進んでいかなければならない。

私は犯罪とは、「自分の人生も周りの人の人生も狂うこと」だと思う。罪を犯した人は犯罪者というレッテルが貼られ、先の人生は真っ暗になり、一気にドン底へ落ちてゆく。

しかし、困るのは、本人だけでなく周りの人も同じだと思う。どんなことがあっても、一度できた深い傷は一生治らないものだと思う。だからこそ、自分一人の軽い気持ちで動かず、周りの気持ちも考えて、本当にしていいことなのかを考えることが大切だと思う。

「信用を失う」これが犯罪の一番の恐ろしさだと思う。私がそうであったように、周りの人もショック、苦しみを味わうことになる。両方の心に傷をつくらないためにも、身近に犯罪が起こるはずないと思っていても、私たちは自分と周りを尊重し、罪を犯さないという選択をするように動いていかなければいけないと思う。